

ピアノと電子オルガンデュエットのあり方

～新たな演奏スタイルの確立のために～

松本 裕樹

1. はじめに

昨年度の本学会誌で、筆者は、知人の主催する劇団のミュージカルでの電子オルガン演奏に参加した経験を基に、電子オルガンを芸術創造楽器と位置づけ、その存在意義と活用方法、そして電子オルガン奏者に求められる資質について述べた。

その後、本年3月に再び、同劇団のミュージカル演奏に参加した。そこで今回の公演で取り組んだピアノと電子オルガンそれぞれの楽器の活用方法に加え、PAのあり方など、新たに気が付いた点について、本論稿で述べることとする。

2. ミュージカルの概要

・演目「倭神伝承～古事記異聞～」

国を生み、神を生み、八百万の神が住まう日の本が成り立つまでの物語であり、古事記・日本書紀を基にした壮大なスケールのオリジナル日本神話ミュージカル。脚本及びミュージカルナンバーの作曲は谷口真彌氏。

・公演日時

2015年3月21日（土）①15:00～

〃 22日（日）①11:00～、②16:00～

・公演会場

大阪府立男女共同参画・青少年センター

（大阪府中央区大手前1丁目3番49号）

・出演者

げきだんおとめ
劇団音芽（代表：平橋佳代子）

2002年に発足した、関西を中心に活動する女性ばかりのミュージカル劇団。『感動の芽を多くの人に』の言葉をモットーに、教育機関での鑑賞会等や寺院法要に於いての依頼公演、そして毎年行っている自主本公演を主な活動とし、様々な場所で公演を行っている。今回の公演で、本公演は16回目を迎える。

・演奏者

マキシム
MaxiM（ピアノ：丸田綾音、電子オルガン：松本裕樹）
2011年結成。結成以来、様々なホール、サロンなどで

コンサート・ライブを開催。

2016年7月、大阪府大阪市及び阪南市にて結成5周年ライブを開催予定。

3. 演奏曲の概要

今回の公演は、過去に作られた短編ミュージカルに、新たな楽曲と演出を加えた再演であり、初演時は、丸田氏のピアノ生演奏と音源再生での上演であった。

今回は、昨年の本公演時と同じく、ピアノと電子オルガンでの生演奏という演奏形態をとり、全28曲のミュージカルナンバー（表1参照）とBGMをアレンジし、演奏した。

4. それぞれの楽器の使い方

今回の公演では、ピアノと電子オルガンそれぞれの役割分担を前回よりも明確になるように工夫した。

まず先回の公演で、キャストから、音の立ち上がりが早く、輪郭のはっきりとしたピアノの音のほうが、歌い出しの合図としてはわかりやすいという意見があった。そのため、オートリズムを使用しないほとんどの楽曲のイントロやその他歌い出しのきっかけの発音はピアノが担当した。

それに対して、ダンスナンバーを主とする楽曲では、電子オルガンがオートリズムを活用し、リズムセクションを担当した。奏者が予め打ち込んだリズムパターンに加え、ELS-02シリーズになって、より種類が増えたレジストレーションメニューのリズムパターンを用い、クラシック系及びポピュラー系双方のダンスナンバーにおいて効果的な演奏・演出を行うことができた。

また楽曲の演奏ではピアノは分散和音を多く用い、ハーブや箏などの分散和音が特徴的である楽器パートのイメージをピアノに担当してもらうこととし、電子オルガンでは、場面を印象づけるために実際の箏の音が欲しいなどという場面以外では、それらの楽器を選択することは避けた。代わりに電子オルガンでは、持

続音を活用し、オブリガートには主に木管・金管楽器セクション、ハーモニーには主に弦楽器セクション、ベースラインにはそれぞれのセクションの低音楽器に打楽器を加えたオーケストレーションで演奏した。さらに今回はSEもほとんどのものを担当した。

メロディーラインの追従や低音部については、キャストの歌やお互いの弾く音に合わせてそれぞれ臨機応変に対応した。

楽曲演奏に関しては、ピアノのみ、電子オルガンのみ、両楽器で、といった3パターンの形式を使い分けながら、場面に合った演奏となるように心がけた。

先回そして今回の公演を通して、少しずつではあるが、ピアノと電子オルガンのそれぞれのメリットを生かしたデュエットという演奏形態での役割分担ができつつある。今後の公演を通して、さらなる効果的なデュエットの独自性を模索していきたいと考える。次項では、この点を踏まえて行った音作りの課題について述べたいと思う。

5. ミュージカル生演奏におけるPAの考え方

劇団音芽の本公演では、毎回同じPA担当者が付き、キャストと演奏者一切の音響を担当している。

ピアノ・電子オルガンはともに、本体スピーカー（ピアノの場合はマイクを立てる）及び舞台・演奏者の至近距離・会場内にそれぞれ設置した外部スピーカーの両方から音が鳴るように設定をしてもらっている。

これは、もちろん会場のキャパシティが広く、キャストが生声ではなく、マイクを使つての演技であることが理由ではあるが、演技をするキャストにとっては、舞台上での演技だけでなく、舞台袖からのコーラスなどもすることから、その場合は特に、舞台の下で行われている演奏を視覚的にとらえることは少し難しいと考えるからである。そのため、より聴覚的に演奏をとらえやすくするためにも、双方の楽器の演奏情報を外部スピーカーから聴取できるのが望ましいと考えられる。

また電子オルガン奏者にとっては日常的な、オートリズムのテンポに合わせて演奏するという事に慣れていないキャストやピアノ奏者にとっては、特にダンスナンバー演奏の際には、演奏のほかにキャストのセリフや歌も入り、複数のキャストの音声の方が電子オルガンよりも大きくなってしまふことが多く、オート

リズムのテンポがつかめなくなってしまう傾向がある。

そのため、テンポの把握のためにも、キャスト・ピアノ奏者それぞれに対して、外部スピーカーから出音することによって、電子オルガンから双方へコンセンサスが取りやすくなると考えられる。

客席に対しては、奏者とPA担当者と、前日リハーサルと当日ゲネプロを通して、双方の意見を聞きながら、本番直前まで音量やバランスの調節を行っている。

毎回の本公演では、ホールでの音量・バランス調節の時間が限られているため、すべての音を適切なバランスで客席にアウトプットできているとは言い難いが、奏者がアウトプットに対して責任を持ち、さらにPA担当者を信頼し、お互いに常にコンセンサスを取ることで、音環境はかなり整うと感じられる。また実際に音環境が整った状態では、演奏に対するモチベーションが上がり、奏者自身、本番中に沸いた、違った演奏のアイデアをひそかに実践したりすることもでき、リアルタイム演奏の醍醐味を味わっている。良い意味で、遠慮をした演奏をしなくて済むことがとても心地よいと感じられた。

6. まとめ

今回のミュージカル公演を鑑賞していただいた、学会仲間であり、ドリマトーン奏者でもある森田知恵氏によると、エレクトーンの音色がよりリアリティを追求していることで、ピアノや他の楽器と混じりやすい音色をしている印象であったとの意見をいただいた。

これまで再現芸術また創造芸術の両面で電子オルガンのアイデンティティが模索されてきた。そして、現在まで、電子オルガンのアイデンティティの一つとして、ハイブリッドオーケストラやピアノコンチェルトのオーケストラパートといったスタイルが徐々に確立されてきている。今後は創作ミュージカルやその他の演奏における場面で、ピアノと電子オルガンのデュエット（どちらが主で副かということではなく、両楽器が同列となるようなかたち）といったスタイルも一つの新たな演奏スタイル、そして電子オルガンのアイデンティティの一つとして、確立していくことができるのではないかと考える。

なお、次回の劇団音芽の本公演でも、ピアノと電子オルガンでのミュージカル演奏を引き受けることとなった。次回本公演は、2016年3月に大阪市内で行わ

れる予定である。電子オルガン奏者として、さらなる
オリジナリティのある音作りや演奏に尽力していきたい
と考えている。

(和歌山大学教育学部・電子オルガン演奏 まつもと ゆうき)

表1；ミュージカルナンバー一覧

第1幕 (M1～M14)		
楽曲 No.	タイトル	楽曲のテーマ
M1	天地開闢	伊邪那岐・伊邪那美による国生み・神生みの始まり
M2	男神錯乱	伊邪那岐の錯乱
M3	黄泉平坂	約束を破った伊邪那岐に対する伊邪那美の怒り
M4	三神誕生	天照大神・月読命・須佐之男命の誕生
M5	陽光讃歌	高天原に降り立った天照大神
M6	海神咆哮	須佐之男命の錯乱と暴挙
M7	神々嘆叫	八百万の神々の嘆き
M8	神逐之儀	月読命からの須佐之男命への罰
M9	陰之国産	黄泉国での伊邪那美と須佐之男命・月読命のやり取り
M10	生贄予言	伊邪那美の思惑
M11	櫛名田姫	櫛名田姫の嘆き
M12	大蛇襲来	八岐大蛇の出現
M13	月神語歌	月読命の語り
M14	日乞舞歌	天岩戸の前での天宇受賣のダンス
M15	陽神再誕	天照大神の再誕
第2幕 (M15～M33)		
M16	陽神再誕 (リブライズ)	同上
M17	六花飛散	須佐之男命が生んだ雪
M18	四季廻文	四季という概念の誕生
M19	天孫降臨	瓊瓊杵尊と大国主命の誕生
M20	因幡白兔	因幡の白ウサギの登場
M21	生活概念	瓊瓊杵尊と大国主命によるさまざまな概念の誕生
M22	花嫁選択	瓊瓊杵尊の結婚 (木花咲耶媛と磐長媛)
M23	繁栄格差	人世の繁栄
M24	海幸山幸	海幸彦と山幸彦の登場
M25	鯛鮓舞踊	竜宮城での鯛や鮓の舞い踊り
M26	平坂回帰	黄泉平坂への回帰
M27	輪廻別離	櫛名田姫の輪廻と須佐之男命との別離
M28	倭神伝承	神話の終焉と倭の大国の建立

